"Straw for Youre Gentilesse!": 'Gentilesse' と巡礼 Franklin

安　藤　光　史

I

Cambridge の Corpus Christi College は，Chaucer 作，*Troilus and Criseyde* の写本（MS 61）を所蔵しているが，この写本の扉絵には，Chaucer が庭園に設(し)つらえられた書見台(レクターン)にむかって，Richard 二世とおぼしき人物を始めとする大勢の宮廷人を前に作品を朗読している図が描かれている．Chaucer の時代，14世紀も後半頃になると，読み書きの能力の一般への浸透とともに，文学作品は読まれるものとしても存在を主張し始める[1]．しかし，この扉絵は，当時依然として，聴衆を前に朗読するというのが作品伝達の基本的なあり方であったことをもの語っている．直接作者は聴衆に訴え，即座に彼らの反応を感じとることができたわけである．もちろん宮廷詩人 Chaucer の聴衆は宮廷人，それに London の一部の知的な市民が加わったかも知れない[2]．このような宮廷人という特定の聴衆を意識した作品として本稿では *The Franklin's Tale* をとり上げる．

本稿の立役者 Franklin は，'gentilesse' を志向する男として *The Canterbury Tales* の舞台に登場するが，'gentilesse' については，詩人 Chaucer 自身が強い関心を示しており，作品全般を通じて随分とこの議論や言及が目立つ．なにぶん広義にわたる語であるため，簡単明瞭に定義を下すのは容易ではないが，彼の書いた 'gentilesse' をテーマとする ballad, *The Wife of Bath's Tale* の老婆の議論，Parson の説教などから推して，

Chaucer の関心は,「高貴な生まれであること」と「高貴な性格を有すること」とのギャップにあったらしい. *The Wife of Bath's Tale* の中で Chaucer は老婆に, "men may wel often fynde / A lordes sone do shame and vileynye." (*WBT*, 1150–51)[3] と語らせているが, これなどは, 葡萄酒商という市民階級から宮廷という門閥支配の世界に入った Chaucer 自身の感慨であったかも知れない. ところが, 以下は Alan T. Gaylord の指摘だが, 当時の宮廷人達は自己の 'gentilesse' を信じて疑わない人種であったという.

> . . . courtly people[5], wishing to speak of virtue in their own terms and to consider everything they did or said *trés noble et debonaire*, would be the last to acknowledge their *gentilesse* was superficial.[4]

このように 'gentilesse' に関しては矜持をいだく宮廷人を前に, 市民階級出身の Chaucer が 'gentilesse' について語ること, ましてや, 彼らの 'gentilesse' が浅薄であることを, 決して非礼になることなく諭すことは随分と骨の折れる仕事であったに相違ない. 当然, 直接的な表現を避け, irony や strategy of indirection に訴える必要が生まれてこよう[5]. 本稿では, そのような詩人 Chaucer の意図のあらわれとして, 'gentilesse' を志向する巡礼 Franklin と, また, そのような語り手の性格を反映した物語として[6] *The Franklin's Tale* を検討してみたい.

II

巡礼のひとり Squire が, 宮廷に繰り広げられる不思議な魔術の話, さらに, 雄鷹と隼の宮廷愛の物語, といかにも貴族の御曹子らしい話にひと区切りをつけて, 次の主題に移ろうとした矢先, 突然, "In feith, Squier, thow hast thee wel yquit / And gentilly." (*SqT*, 673–74) と言って Franklin が口をはさむ. 彼は相手の Squire には全く話す隙を与えず,

一方的に畳み掛けるように彼の "eloquence" を褒めあげて (*SqT*, 675-81), 事実上, Squire がこれ以上話を続けられない状況をつくりあげてしまう. その場の主導権が自分に移ったとみるや, Franklin は, "I have a sone . . ." (*SqT*, 682) と言って, 我子と Squire との比較に話を向ける. 出来の悪い息子に対する愚痴である. 分別 (discrecioun) もなく, 人間のさまざまな徳 (vertu) に耳を傾けるでもなく, 金を持たせると賽子(サイコロ)賭博で全部すってしまう. すこしは貴族の子弟 (gentil wight) と交際して立派な行儀作法 (gentilesse) を覚えてくれればいいのに, 身分の低い小姓 (page) とばかり遊んでいる (*SqT*, 682-94). というのだが, ここで気付くのは, 放蕩息子への不満にかこつけてもらす Franklin の 'gentilesse' への強い志向である. わずか20行ばかりの科白の中に, "gentilly", "gentil", "gentilesse" の語をそれぞれ一度ずつ, さらに "vertu"[7] を二度, "vertuous" を一度使用し,

> Fy on possessioun,
> But if a man be vertuous withal!
> (*SqT*, 686-87)

と豪語してはばからない. 確かに, ここに, われわれは意識して 'gentilesse' について語ろうとする Franklin の姿を認める.

ところが, このように Franklin が息子に対する愚痴を綿々と語り始めると, これもまた突然, Host の横槍が入る.

> "Straw for *youre gentilesse*!" quod oure
> Hoost.
> "What, Frankeleyn! pardee, sire, wel *thou*
> woost
> That ech of you moot tellen atte leste
> A tale or two, or breken his biheste."
> (*SqT*, 695-98) [Italics mine]

巡礼のつれづれを慰めるゲームの "governour", "judge", "reportour" の三役を一身にひき受ける Host (*GP*, 813–14) は, Franklin の長ったらしいお談義でゲームが滞るのを心配しているのであろうが, あえてここで, 彼が 'gentilesse' の一語をもってそれをしたのは一体何故か. それに, "*youre* gentilesse" とことさら敬称の "youre" を用いたかと思うと, 次行では直ちに "*thou* woost" と親称に転ずる Host の語り口に, Franklin の 'gentilesse' を揶揄するような含みが読みとれないか[8]. 例えば, *The Monk's Tale* を Knight が中断したとき, Host は一貫して敬称を用いていた (*NPT Prol*, 2780 ff) ことを思い出すと, このことははっきりする. 重要な一瞬, その背後に詩人 Chaucer の存在を感じさせる Host の発言だけに注意したいところである. そこで Franklin と彼の 'gentilesse' 観を調べてみたいわけだが, その前に, 他の箇所で Chaucer が 'gentilesse' をどのように扱っているのか一瞥しておくことにしよう.

すでに触れたが, 'gentilesse' に関して Chaucer が主に問題にしているのは, 'gentilesse' とは「高貴な生まれであること」(gentility of birth) なのか「高貴な性格を有すること」(gentility of character) なのか, という点である. Chaucer の時代は, 血への根強い信仰の時代であった. 例えば, Chaucer 作, *The Book of the Duchess* で知られる Blanche 夫人の父 Henry of Grosmont は, 人の "gentilesse" を判断する三条件をあげて, 第一に, 父親の身分が "gentil" であることだと言い, 第二に母親の身分が "gentil" であることだと指摘するなど[9], 血筋を重んずる考え方があらわであるし, Ramon Lull など中世騎士道の理論家は, こぞって gentility of birth をすぐれた騎士に不可欠の要素とみている[10]. 中世の人々は, 人間の資質が血によって遺伝する, と信じていたのである[11]. そうした時代にあって Chaucer は, Boethius, Dante, Jean de Meung 等中世の作家達がしたように[12], 例えば, 短詩 *Gentilesse* とか, *The Wife of Bath's Tale* の老婆の議論とか, Parson の説教などの中で, gentility

of character の重要性を繰り返し説いたのである.

Chaucer の短詩で, *Gentilesse* と *The Complaint of Venus* は共に 'gentilesse' をテーマにうたったものだが, 両詩の描く 'gentilesse' の相異を考えるのも彼の 'gentilesse' の扱い方を知る手がかりとなる[13]. 片や, キリスト教に根ざし, 神の意志に従い神の子となることによって得られる 'gentilesse' (verray gentilesse) と, 片や, 宮廷愛に根ざし, 恋人への献身によって得られる 'gentilesse' (courtly gentilesse) と, 共にさまざまな徳目の総称という共通点を持ちながら, 両者は本質において異なる. こうした 'gentilesse' の異った価値観に立脚する二つの面を Chaucer は必要に応じて描きわけている. 例えば, *The Canterbury Tales* のしめくくりとして Parson が説く告解の秘跡をすすめる大説教の中で薦められる 'gentilesse' は前者であろうし, また, Criseyde への献身によって, "sours of gentilesse" (*Tr*, Bk V, 1591) と讃えられる Troilus の 'gentilesse' は後者であろう. *The Romaunt of the Rose* の God of Love の説くところに拠ると, 'courtly gentilesse' は, 精神性を追求するものの, 主として宮廷人としての礼儀作法, 素養に重きを置いて, この世を楽しく愉快に生きる術に終始している[14]. 世襲財産 (old richesse) に対する考え方でも両者は対照的で, 'verray gentilesse' がそれを否定し, 清貧をすすめるのに対し, 'courtly gentilesse' では, "richesse" は必須の美徳である. 当時, God of Love の薦めるような素養を身につけるには漠大な費用を要したであろうからである. では, このように 'gentilesse' の二つの面を描いて Chaucer はどのように見ていたか. おそらく彼は単純な二者択一はしなかった. 限りある命を受けた地上の衆生のひとりとして地上的愛に立脚した 'gentilesse' の魅力も十分に知った上で, なお, 教養豊かな, 節度ある中世人として, 当然, 門地に拠らず, キリストの跡をたどることによって得られる 'gentilesse' を究極の目標としたと考えられるのである.

さて，もう一度 Franklin の *The Squire's Tale* の中断の場面に話を戻そう．確認したいのは，Franklin が志向する 'gentilesse' がどのような性質のものか，という点である．これには，彼が Squire に反応したという事実がひとつのカギとなる．*The General Prologue* において，"So hoote he lovede that by nyghtertale / He sleep namoore than dooth a nyghtyngale." (*GP*, 97–8) と紹介される Squire のいかにも若い宮廷貴族らしい振舞いと彼の話に Franklin の心は動いた．彼の眼中にあるのは 'courtly gentilesse' なのである．また，身分の低い "page" より "gentil wight" と息子が交際してくれたらと願う彼の考え方は，gentility of birth に重きを置く彼の 'gentilesse' 観をにおわせている．結局，彼が Squire に向って述べたわずかな言葉の中にも，すでに，彼の標傍する 'gentilesse' は，Chaucer が究極の目標としてわれわれに提示する 'verray gentilesse' とは違う，世俗臭のある 'courtly gentilesse' であることがわかる．

では，一体，Franklin の 'gentilesse' 志向は何に由来するのか．それは gentleman として未だ認められない彼の social status に関わる劣等感からくる上昇志向 (social aspiration) に起因するのか．議論のやかましいところであるが[15]，はっきりしているのは，F. N. Robinson が指摘するように，Franklin は在郷の人でまず宮廷での経験は少なかったという事実である[16]．当時，一般に宮廷貴族の生活様式は大そう強い魅力を持っており，財力のある市民はできる限りこれに倣おうと努めたというから[17]，"sangwyn" (*GP*, 333) という，陽気で，派手好きな性格の[18] Franklin などは特にこの傾向が強かったのではあるまいか．Franklin の 'gentilesse' (courtly gentilesse) 志向は，どうやら，宮廷経験の欠如と social status に関する彼の劣等意識が "sangwyn" という性格と結び付いたもののようである．

The General Prologue の Franklin の横顔（プロフィール）で，まず驚くのは，30行

ばかりの紹介文の半分以上が彼の食道楽の描写に与えられていることである．良質の葡萄酒のまたとない貯蔵家 (a bettre envyned man) であったというし，肉や魚の焼物 (bake mete . . . of fissh and flessh) が山とあった (so plentevous) という (*GP*, 343–44)．また，当時，庶民の口にはとても入らなかったとされるしゃこ (partrich) や鯉 (breem) や大がます (luce) をたくさん養殖していたともいう (*GP*, 349–50)[19].

It snewed in his hous of mete and drynke
Of all deyntees.
(*GP*, 345–46)

と書いたとき Chaucer は，Franklin の豪勢な食生活に苦笑していたのではないか．"[Ironic criticism] must be expressed through what is not said" と Winny が指摘するほど客観的な描写だが[20]，料理のことで気に入らぬとコックにつらく当った (Wo was his cook) という件は(*GP*, 351)，限度知らずの美食振りとあいまってある種の彼の俗物性がはっきり出ている．

このような豊かな Franklin の暮し振りは，'gentilesse' を構成する liberality という徳目と結び付けられる．

Seint Julian he was in his contree.
(*GP*, 340)

彼の邸のホールのテーブルにはいつも食事の仕度がなされていた (*GP*, 353–54)，というのも来客をもてなすための下準備なのである．*The General Prologue* ではすでに紹介済の Friar の描写の中で，

Ful wel biloved and famulier was he [i.e. Frere]
With frankeleyns over al in his contree.
(*GP*, 215–16)

と friar と franklin の結び付きが指摘されるが，例えば，friar (Chaucer の Frere は，"He was an esy man to yeve penaunce, / Ther as he wiste to have a good pitaunce." [*GP*, 223-24] と描かれるが) や今度の巡礼にも仲良く連立って参加している Man of Law などが訪れると自慢の御馳走で気前よくもてなしたのであろう．当時，宮廷人の間に行われた限度知らずの気前のよさ[21]を Franklin もまねているのであろうが，彼の liberality が St. Julian のそれに喩えられるのはすこしひっかかる．St. Julian とは，誤って父母を殺した penance として己れの貴族の地位と財産を投げうって，貧しい旅人に施しをした男である[22]．しかるに，上流志向の Franklin の liberality が村の貧しい人々をも対象としたものであるとは考えにくい[23]．息子が "page" とつきあうと嫌な顔をする男である．とすると，ここの St. Julian は ironic な響をもつことになる．

St. Julian と並んで，Franklin の描写には Epicurus の名がみえる．"pleyn delit / Was verray felicitee parfit" (*GP*, 337-38) を信条とし，"Epicurus owne sone" (*GP*, 336) を自認したというのである．Boethius に拠れば，Epicurus は "delyt is the soverayn good" (*Bo*, Bk III, pr. 2) と規定した男だというが，やはり中世紀において人が最高善とすべきは，Chauncey Wood も指摘するように，神ではなかったか[24]．少なくとも，それが中世人として基本的かつ自然な姿勢であったであろう．さらに，Epicurus が真に意味した "delight" (pleasure) が，実は "life-long serenity of soul" であり，彼の求めた生活が "temperance and simplicity of life" であったとみれば[25]，"Epicurus owne sone" という喩えにも irony が認められるのである．

このように巡礼 Franklin をみてくると，何の不自由もなく悠々生活を楽しんでいる好々爺の像が浮んでくる．宮廷風にならうというのが彼の信条で，その表われとして，随分と optimistic な形での 'gentilesse' 志向がみられるのである．*The Tale of Melibee* の賢妻 Prudence は，

Thou hast ydronke so muchel hony of sweete temporeel richesses, and delices and honours of this world, / that thou art dronken, and hast forgeten Jhesu Christ thy creatour.
(*Mel*, 1411–12)

と夫を非難しているが，もし Franklin に欠点を求めるなら，まさにこの俗物性なのである．Chaucer もそれに対して穏やかな irony という武器を使って批判しているのである．

III

Host の皮肉な中断の後，急き立てられるままに Franklin のする物語は次のようなものである．

Arveragus (knight) はひたむきな愛が実って美しく家柄も高い女性 Dorigen と結ばれる．お互いが譲り合って暮すことを約束しあって，しばらく幸福な生活を送る．やがて騎士の習いとて，Arveragus は名誉を求めて外征に出る．ひとり残された Dorigen は寂しさのあまり親しい友人の慰めも通じぬほど取り乱してしまう．そこへ，かねて Dorigen に思いを寄せていた Aurelius (squire) が言い寄る．驚いた Dorigen は彼の誘惑を斥けようと，夫の無事な帰還をはばむものとして日頃恐れていた海岸の黒い岩を取り除くことができたら，あなたの愛を受けてもよいと約束する．この無理難題に絶望した Aurelius は床に伏すこと二年，弟思いの兄のはからいで魔術をよくする clerk（無名氏）に会い希望の光明を得る．喜びのあまり Aurelius は，岩が消えたら1000ポンドの金を支払う，と男に約束する．その間，すでに Arveragus は帰還して Dorigen と再び幸せに暮している．そこへ岩が消えたという知らせ．驚き動転した Dorigen は不貞な妻にはなりたくないと自殺まで覚悟するが，事情を聞いた夫は約束を守ることの大切さを説いて彼女を Aurelius の許へやる．不審に思った Aurelius はわけを聞き，Arveragus の 'gentilesse' に感動して，淫らな

欲望を恥じ Dorigen を夫の許へ返す．思いは遂げられぬまま 1000 ポンドの謝礼だけが残った．なんとしても謝礼は支払うと主張する Aurelius から，事の成り行きを知った clerk は，Arveragus と Aurelius の 'gentilesse' に心打たれ，自分だって 'gentilesse' を示すことができる，と言って，全く何の報酬も求めず立ち去りました．

という物語であるが，宮廷志向の強い Franklin らしく，古き良き時代の貴族の生活を髣髴させる "Breton lay" に取材し[26]，登場人物にも妻を恋人のように一生愛し抜こうとする knight, 美しく良家の出の女性，Franklin が心を奪われた Squire そっくりの squire を配するなど語り手の関心を反映している．もちろんテーマは，物語の結末で *deus ex machina* の如く作動する 'gentilesse' で，おそらく語り手は，Schofield らが指摘するように[27]，"Gentilesse begets gentilesse." という *sententia* を示したかったのであろう．しかも，その 'gentilesse' とは物語の終わりに付された "Which was the mooste fre, as thynketh you?" (*FranklT*, 1622) という Franklin の問いからも明らかなように，liberality という徳目に重きを置いたものである．Liberality という徳目が Franklin にとって何であったかは，すでにみたとおりである．

梗概からわかるように，この物語では「約束」(trouthe) が重要な位置を占めている．「約束」をめぐって当事者がいかに 'gentilesse' を示すかに，物語の聞かせどころがあると考えてよい．あやうく悲劇，という結末の危機を救う 'gentilesse' の連鎖反応が，"Trouthe is the hyeste thyng that man may kepe." (*FranklT*, 1479) という Arveragus の判断によって始まったという事実は，この物語における「約束」の重要性をよく示している．したがって以下では，主要人物が互いに結ぶ三つの「約束」を軸に，当事者がどのようにそれに対処するのか，またそこに真の 'gentilesse' があらわれているのか，という問題に論点を絞ってみたい．

第一の「約束」は，Arveragus が結婚に際して Dorigen に，夫として

の権力と嫉妬を捨て (Ne sholde upon hym take no maistrie / Agayn hir wyl, ne kithe hire jalousie, / But hire obeye), 恋人のように (as any lovyere to his lady shal), 名目だけの支配権 (the name of soveraynetee) に甘んずると誓ったのに対して (*FranklT*, 745–52), これを "so large a reyne" と受け取った Dorigen が Arveragus の 'gentilesse' を認め, "Sire, I wol be youre humble trewe wyf; / Have heer my trouthe, til that myn herte breste." と言って提示するものである (*FranklT*, 754–59). このように男女の譲歩によって成立した結婚を描いて, 語り手 Franklin は次のような私見を得々と付け加える.

> Heere may man seen an humble, wys accord;
> Thus hath she take hir servant and hir lord,—
> Servant in love, and lord in mariage.
> Thanne was he bothe in lordshipe and servage.
> Servage? nay, but in lordshipe above,
> Sith he hath bothe his lady and his love;
> His lady, certes, and his wyf also,
> The which *that lawe of love acordeth to.*
> (*FranklT*, 791–98) [Italics mine]

結婚という神の定めた制度[28]と宮廷愛の共存に Franklin は拍手を送るのだが, ここは批評家の見解の分れるところである. つまり Andreas Capellanus の言うように, 宮廷愛が結婚の埒外に存在する秘めやかな愛であり, その本質が adultery だとするのなら, "a ful greet sacrement" (*ParsT*, 918) としての結婚と両立するはずがないというのである[29]. 確かに, Franklin はこの話を romance と規定して始めているのだから Robertson などのそういう指摘は正しい. しかし, Chaucer の時代ともなると "mutual service and mutual obedience" の新しい romantic な結婚観が存在したというから[30], 語り手は, いわば古き皮袋に新しき酒を盛ったとも

言える．大切なのはこの夫婦の「約束」が守り抜かれるか否かである．

まず Arveragus から始める．注目したいのは，岩が消えたと知らされて狼狽する Dorigen から事の次第を知った瞬間の彼の態度である．"This housbonde, *with glad chiere, in freendly wyse* / Answerede . . ." (*FranklT*, 1467–68) [Italics mine] とあり，しばらくあって，"he brast anon to wepe" (*FranklT*, 1480) と，夫の様子に不自然な急変があるのだが，Chaucer がおそらくは下敷にした Boccaccio 作，*Il Filocolo* では[31]，夫の態度は次のように描かれている．

> When he had heard this, the husband thought for a long time; and since he was sure in his mind of the purity of the lady, he told her . . .[32]

この夫の毅然とした冷静な行動と Franklin の描く Arveragus の態度は際立った対比をみせているが，Chaucer のこのような改変の理由は何であったのか．言うまでもなく，Arveragus は妻との「約束」を守って，夫となってなお礼儀をわきまえた "lovyere" であろうとしたからである．しかし，事の重大さに気付き，夫として断固たる態度に出ざるを得なくなったとき，彼の口をついて出た科白は，

> You *shul* youre trouthe holden, by my fay!
> (*FranklT*, 1417) [Italics mine]

という命令であった．Arveragus は放棄したはずの "maistrie" を復活させたのである．極限まで courtly な態度をとり続けた Arveragus ではあったが，やはりそれは外面を飾るものでしかなかった．万事それで乗り切れるものではなかったのである．彼はさらに命令を続ける．

> I you *forbede*, up peyne of deeth,
> That nevere, whil thee lasteth lyf ne breeth,

To no wight telle thou of this aventure.
(*FranklT*, 1481–83) [Italics mine]

人に知られなければ "honour" は傷つかないとでも言うのだろうか．この科白によって彼の 'gentilesse' はすっかり色褪せたものになってしまう．もちろん真の "gentil man" はいつにても善行に励む人（moost vertuous alway, / Pryvee and apert [*WBT*, 1113–14]）であるはずである．それでは，Dorigen の場合にはこの「約束」に対してどのような行動をみせるか，Aurelius との「約束」との関連でみてみることにする．

Dorigen と Aurelius の間の「約束」は，夫の留守中に言い寄った Aurelius に彼女が与えるという形で提示される．

"Is this youre wyl," quod she, "and sey ye thus?
Nevere erst," quod she, "ne wiste I what ye mente.
But now, Aurelie, I knowe youre entente,
By thilke God that yaf me soule and lyf,
Ne shal I nevere been untrewe wyf
In word ne werk, as fer as I have wit;
I wol been his to whom that I am knyt.
Taak this for fynal answere as of me."
But after that *in pley* thus seyde she:
"Aurelie," quod she, "*by heighte God above,*
Yet wolde I graunte yow to been youre love,
Syn I yow se so pitously complayne.
Looke what day that endelong Britayne
Ye remoeve alle the rokkes, stoon by stoon,
That they ne lette ship ne boot to goon, —
I seye, whan ye han maad the coost so clene
Of rokkes that ther nys no stoon ysene,
Thanne wol I love yow best of any man,
Have heer my *trouthe*, in al that evere I kan."

(*FranklT*, 980–98) [Italics mine]

もし「約束」の名の下に語られることがすべて「約束」として有効性をもつならば，これも「約束」と言えようが，実際，ここでは "trewe wyf" でありたいと願う Dorigen の気持ちが実現不可能な「約束」という形になっただけなのである．確かに，"trouthe" とは言うものの，それは真面目にとってはいけない冗談 (pley) なのである．「冗談を真面目にとってはいけない」(men shal nat maken ernest of game. [*MilT*, 3186]) というのが，今度の巡礼仲間の合言葉であったはずである．Dorigen の冗談を本気でとった Aurelius は野暮のそしりをまぬがれない．ところが，この「約束」の当事者達はすべてこれを真面目にとって「約束」としての有効性を疑いさえしない．この奇妙な状況は，何よりも語り手 Franklin 自身がこれを「約束」として認めることによって，Dorigen を，妻ではあるが，"lawe of love" に従った慈悲深い romance のヒロインとして描きたいとする矛盾から生ずるのである．彼女の科白の後半，それは "pley" であるとはいえ，神に誓いを立て，ことさら「約束」として明言しているのはそういう含みをもたせるためである．Aurelius は Dorigen の "trewe wyf" の下に隠れていた Venus の面を表面化させる "catalyst" として働いているのである[33]．Dorigen のとった courtly な態度がこの後物語の人物達に思いもよらぬ大きな波紋を投げかけることになるのである．では，Dorigen との「約束」をめぐって Aurelius は，いかに振舞ったか，それは彼と clerk との「約束」とも関わることである．

Aurelius と「約束」を結ぶことになる clerk は identity のはっきりしない男として登場する．Aurelius の横恋慕の片棒を担ぐという大切な役を演ずるのだが，無名氏で，語り手からは，"clerk" (1173 &c), "maister" (1202 &c), "magicien" (1184), "philosophre" (1561 &c) などと呼ばれており，何やら得体が知れない．Aurelius はこの男に，

Dorigen が求めた条件，即ち海岸の岩をひとつひとつすべて除去すること (remoeve all the rokkes, stoon by stoon [*FranklT*, 993]) を依頼するのだが，相手の clerk はこの仕事の難しさを強調して，"Lasse than a thousand pound he wolde nat have, / Ne gladly for that somme he wolde nat goon." (*FranklT*, 1224–25) と渋い顔をして途方もない高額の報酬を要求する．Aurelius の方は，前後の見境もなく，大喜びで，ふたつ返事に，

> Fy on a thousand pound!
> This wyde world, which that men seye is round,
> I wolde it yeve, if I were lord of it.
> (*FranklT*, 1227–29)

と，まるで語り手 Franklin が Squire に放った科白 (Fy on possessioun [*SqT*, 686]) を雰囲気させるような言葉で承諾し，"Ye shal be payed trewely, by my trouthe!" (*FranklT*, 1231) とこれを「約束」と明言するのである．

この「約束」に対してまず Aurelius はいかに行動したか．Dorigen を夫に帰した彼は直ちに clerk と会う．そこで示す彼の態度は，"Fy on a thousand pound!" と威勢のよい啖呵を切った彼にしては，随分と歯切れが悪いものである．とりあえず彼は，500 ポンドだけさし出して，自分の窮状を訴えて，

> wolde ye vouche sauf, upon a seuretee,
> Two yeer or thre for to respiten me.
> (*FranklT*, 1581–82)

と数年の猶予を請うのである．これを聞いた clerk は，"Have I nat holden covenant unto thee?" (*FranklT*, 1581) と非難する．*Il Filocolo* で Aurelius に相当する男 Tarolfo が，はっきりと自分の財産の半分を

報酬として約束して，いよいよとなると，

> Whenever you please, go and take possession of half of my castles and my treasured, as I promised you.[34]

と，きっぱりと liberality を示しているのと比べると，Aurelius が実行不可能な「約束」をいかに軽はずみにしたかがわかる．「約束」を結ぶ段階では liberal (courtly) に振舞ったものの，窮地に面して態度を翻えすという Aurelius の行動のパターンは，Arveragus のそれに通ずるものがある．

Aurelius の依頼を受けた clerk はどうか．彼が真に「約束」を守って岩を除去するか否かは，登場人物の行動すべてに関わる大切なところである．ところが，不思議なことに，語り手 Franklin はこの男に随分と冷淡な描写を与える．彼の仕事振りはかなりの行を費して描かれるが，その中に次のような彼の 'gentilesse' を疑わせるような行が挿入されているのである．

> to maken illusioun,
> By swich an apparence or jogelrye
> (*FranklT*, 1264–65)
> To maken his japes and his wrecchednesse
> Of swich a supersticious cursednesse
> (*FranklT*, 1271–72)
> For swiche illusiouns and swiche meschaunces
> As hethen folk useden in thilk dayes
> (*FranklT*, 1292–93)

というように clerk のインチキ仕事を繰り返し強調した上で[35]，語り手は，

> thurgh his magik, for a wyke or tweye,
> It *semed* that the rokkes were aweye.
> (*FranklT*, 1295–96) [Italics mine]

と彼の仕事の描写を締くくるのである．岩がなくなったように見えた (semed) のと除去する (remoeve) のとは，もちろん同じことではない．結局，clerk は「約束」の条件を満していない以上，1000ポンドの報酬を受ける権利はない．とすると Aurelius も Dorigen の与えた条件を満たすことができなかったわけである．とみてくると，*The Franklin's Tale* の登場人物はすべてこの男の作り出した "illusioun" に欺かれたことになる[36]．Dorigen は courtly lady を装ってうかつな約束を結び，夫 Arveragus は己れの体面を保つことに汲汲として事件の事実を正しく把握する冷静さを欠く．Aurelius もまた気前のよさを演ずるあまり出来ない約束を clerk に与えてしまう．そのような登場人物の，物事の表面にとらわれて実体をみようとしない courtly な行動様式こそ，あやうく悲劇という状況をつくり出す最たる原因だったのである．

IV

Chaucer の時代，騎士道のあり方は大きく変貌を遂げていた．キリスト教擁護のための騎士道 religious chivalry は過去のものとなり，宮廷愛に立脚した romantic chivalry が世を風靡していたのである．そのようないきさつは，*The Canterbury Tales* の中でも Knight と Squire の対比にはっきり読みとることができる．片や，「キリスト教のために戦った」(foughten for oure feith [*GP*, 62]) Knight と，片や，「婦人の歓心を得んと」(In hope to stonden in his lady grace [*GP*, 88]) 戦った Squire と．このような時代の趨勢に対して，Chaucer が Moral Gower と呼んで親しんだ同時代の宮廷詩人 John Gower は，強い遺憾の意を表明している．

> Now tell me . . . : what honor shall a conqueror have if a woman's love can conquer him? . . . . The end will bring nothing but inevitable folly upon the man for whom Venus initially leads the

way to arms.[37]

Gower は宮廷愛を動機とする騎士道を批判して，そのもたらす結果は "folly" だときっぱり言い切っているのである．

このような批判の対象であった当時の宮廷人＝聴衆の前に，Chaucer は Franklin を登場させる．財産にものを言わせ，ひたすら宮廷貴族の生活振りをまねるこの男に，憧れの Squire に語り掛けさせ，宮廷人の証としての 'gentilesse' (courtly gentilesse) への関心を吐露させ，さらに，'gentilesse' をテーマとする物語をさせる．もっとも物まねの域を出ない Franklin に寸分の隙もない 'gentilesse' の物語ができるはずがない．彼が 'gentil dede' と考えて提示した登場人物の行為はさまざまな欠陥を内蔵していた．それは今みた通りである．しかし，語り手の "sangwyn" という多分に optimistic な性格と彼一流の 'gentilesse' の皮相な解釈とによって，まさに起りかけた悲劇は回避せられ，happy ending の美談として幕となりはするが，そもそもこのような逼迫した事態の生じたその根がどこにあるかといえば，Arveragus と Dorigen が courtly な態度を維持しながら結ばれ，そこへ courtly lover の Aurelius が介入し，結果 Dorigen の中に存続していた courtly lady の一面が誘発され表面化し，言わずもがなの約束を与えてしまったことによるのである．'Gentilesse' をしきりに求める Franklin の，こうありたいという願望と，そうではないという現実のギャップを描いて，そこにおかしみを誘いつつ，聞き手の宮廷人に宮廷愛に立脚する 'gentilesse' の愚かさを認識させ，より高い 'verray gentilesse' に彼らの目を向けさせようとする．物語に先立って Host が Franklin に投じた科白，"Straw for youre gentilesse!" は，そういう Chaucer の意図をよりはっきりさせるための警告の意味を含んでいたのである．

注

1 J. A. Burrow, *Ricardian Poetry* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 13.

2 Gervase Mathew, *The Court of Richard II* (London: John Murray, 1968), p. 72. Chaucer 文学の口誦性については，斎藤勇，「チョーサー文学の門口」，『英語青年』5 (1980), pp. 2–4.

3 Chaucer からの引用はすべて，F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford University Press, 1974) に拠った．なお，本稿中使用した Chaucer 作品の略号はすべてこの版の略号表 (p. 647) に拠った．

4 Alan T. Gaylord, "'Gentilesse' in Chaucer's 'Troilus'," *Studies in Philology*, LXI (1964), p. 21.

5 *Ibid.*, p. 21.

6 Cf. R. M. Lumiansky, *Of Sondry Folk* (Austin: University of Texas Press, 1955), pp. 7–9.

7 ここの "vertu" は現代語の "virtue" より幾分広く，"manly qualities in general" ぐらいの意味でとらえておく．(A. C. Spearing [ed.], *The Franklin's Prologue and Tale* [Cambridge: At the University Press, 1973], p. 90.)

8 Alfred David, *The Strumpet Muse* (Bloomington & London: Indiana University Press, 1976), p. 186.

9 Henry of Grosmont は，三つ目の条件として，その人自身が "gentil" としてふさわしい言動をとれるかどうか，またその人が他の "gentils" との交際を大切にするか否かという点をあげている．(Terry Jones, *Chaucer's Knight* [London: Weidenfeld and Nicolson, 1980], p. 116.)

10 Cf. Sidney Painter, *French Chivalry* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1977), pp. 68ff.

11 "...the men of the Middle Ages had no doubt that all traits were inherited and that a good soldier must come from the blood of good soldiers." (*Ibid.*, p. 98.)

12 Cf. George M. Vogt, "Gleanings for the History of a Sentiment: Generositas Virtus, Non Sanguis," *JEGP*, 24 (1925)

13 Cf. 拙論，「Chaucer における 'gentilesse' の二つの面」，『愛知工業大学研究報告』第16号 (1981).

14 John Stevens, *Medieval Romance* (London: Hutchinson University Library, 1973), p. 51.

15 *OED* に拠ると，Franklin は14–15世紀の地主階級の名称で，自由民ではあったが noble birth ではなく，社会的には gentry の次の位とされていたという．(*OED* の 'Franklin' の項.) これに対して，Gerould は Franklin を当時すでに "landed-gentry" であったとして，彼の social aspiration を否定する．(Gordon Hall Gerould, "The Social Status of Chaucer's Franklin," *PMLA*, 41 〔1926〕) Gerould の説を採る批評家も最近多いが，gentry 論争の旗頭トーニーですら，こうした地主階級の人々が gentry として認められていく過程を16世紀以降にみているほどだから（トーニー，『ジェントリの勃興』〔東京：未来社，1976〕)，Chaucer の時代にあっては，やはり，Robertson のいうように，"... the Franklin was in a distinctly subservient position to the Peers ..." (D. W. Robertson, *Essays in Medieval Culture* 〔Princeton, New Jersey: Princeton University Press〕, p. 277.) と考えるのが妥当であろう．

16 F. N. Robinson, *op. cit.*, p. 659.

17 ホイジンガ，『中世の秋』堀越孝一訳（東京：中央公論社，昭和51年)，p. 203. 例えば，Chaucer の Prioresse ですら，「つとめて宮廷風をまねていた」(... peyned hire to countrefete cheere / Of court ... 〔*GP*, 139–40〕) という．

18 Chaucer 時代の俗謡に "sangwyn" の人の性格をうたったものがある．

Off yiftes large, in love hath grete delite,
Iocunde and gladde, ay of laughyng chiere,
Of ruddy colour meynt somdel with white;
Disposed by kynde to be a champioun,
Hardy I-nough, manly, and bold of chiere.
Of the sangwyne also it is a signe,
To be demure, right curteys, and benynge.

(R. H. Robbins, *Secular Lyrics of the 14th and 15th Centuries* 〔Oxford: At the Clarendon Press, 1950〕, p. 72.)

19 当時，「魚は貴族の食べるもの」というのが庶民の常識だったという．(井上泰男，『西欧文化の条件』〔東京：講談社，昭和54年〕，p. 68.)

20 James Winny (ed.), *The General Prologue to the Canterbury Tales* (Cambridge: At the University Press, 1965), p. 101.

21 Sidney Painter, *op. cit.*, p. 30–34.

22 Cf. R. T. Davies (ed.), *The Prologue to the Canterbury Tales* (London: Harrap, 1980), p. 95.

23 D. W. Robertson, *op. cit.*, p. 278.

24 Chauncey Wood, *Chaucer and the Country of the Stars* (Princeton, New

Jersey, 1970), p. 270.

25 Cf. R. T. Davies, *op. cit.*, p. 95. また，現代語の "epicure" にみられるような誹謗的意味が含まれるようになるのは，16世紀以降のことである．Cf. Alfred W. Pollard, *Chaucer's Canterbury Tales: The Prologue* (London: Macmillan, 1975), p. 65.

26 Cf. Thomas C. Rumble, *The Breton Lay in Middle English* (Detroit: Wayne State University Press, 1965), pp. xiii ff.

27 William Henry Schofield, *Chivalry in English Literature* (Boston: Merrymount Press, 1912), p. 54 や R. K. Root, *The Poetry of Chaucer* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1957), p. 277.

28 "This is verray mariage, that was established by God . . ." (*ParsT*, 920)

29 例えば，D. W. Robertson, *op. cit.*, p. 284.; Bernard F. Huppé, *A Reading of the Canterbury Tales* (New York: State University of New York, 1967), p. 170.; Paul Edward Gray, "Synthesis and the Double Standard in the *Franklin's Tale*," *TSLL*, 7 (1965), p. 216 など参照.

30 Gervase Mathew, *op. cit.*, p. 135.

31 W. F. Bryan and Germaine Dempster (ed.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (Atlantic Highlands, N. J.: Humanities Press, 1941), p. 377. なお，本稿中使用した *Il Filocolo* の現代英語訳は，Robert P. Miller (ed.), *Chaucer: Sources and Backgrounds* (New York: Oxford University Press, 1977) に拠った.

32 Robert P. Miller, *op. cit.*, p. 128.

33 Paul Edward Gray, *op. cit.*, p. 219.

34 Robert P. Miller, *op. cit.*, p. 124.

35 Luengo は，この clerk の用いたのは "magik natureel" で，岩が消えたのは高潮のためと指摘する．Anthony E. Luengo, "Magic and Illusion in the *Franklin's Tale*," *JEGP*, 7 (1978).

36 このような物事の実体をみようとしない登場人物の姿勢は "myopia" と評されよう．(*Ibid.*, p. 12).

37 Robert P. Miller, *op. cit.*, p. 194.